

行、明年筍莖交出とあり、是竹醉日と稱するなり、皆詩料となすべし、又釋梅國が櫻陰腐談に、薜竹莫如薜筍、薜竹則艱焉、移之之勞、種筍則便焉、移之之速、大要筍出上二三寸許、掘地欲廣、不傷其根、須留宿土、而移時大飲爲好、無百不一活者、此余所親見、以告竹之愛同予者焉とある、いまだ不試ども序にかいづく、

〔日本書紀景行〕五十七年九月、造坂手池、即竹薜其堤上、

〔吾妻鏡十四〕建久五年二月廿二日甲寅、自三浦澀谷等竹數十本被召寄之、今日被栽南御堂後山麓、將軍家賴○源令監臨給、三浦介奉行之云云、

〔有德院殿御實紀附錄十八〕公吉宗○德川殊に林園泉石の觀をもてあそばせ玉ふ事もなく、一草一木の微にいたるまでも、みなもの、用にたつべきものをうゑさせ玉へり、そのなかにも竹はねきて實用の物なりとて、年々に數種をうゑられしが、これより先吹上の御庭に、田舎といへる茶亭のありしを、こばたしめ玉ひ、其あとに真竹六百株を植させ玉ひしが、享保十年、植木門より半藏門までの裏山通に移しうゑられ、それよりまた大土手なだれに四百株また大道通矢來内外の土手にも三百株、一の門内に淡竹三百株、また草加驛よりも大竹六株をうつされ、小なへ竹なども追々植られしに、裏山通の竹年々に繁茂せしかば、この筍をもて日毎の厨料にもせられ、又年年材木奉行に下して、材木の用とせられ、折損せしをば園丁等にあたへ、かれらが所徳とせしめ玉ひしとなり、

〔白河樂翁公傳〕國產の事に心を用ひ玉ひ○申孟宗竹八幡の竹の根生姜さつま芋館たばこの種を求て播しめ○下略

〔雍州府志六土產〕竹 所々有之、西郊產特大也、其至巨者直破之、其本末留一節、其餘悉剗去其節、橫屋檐受屋上所滴之雨水、自端末圓穴傳堅通樋、是謂橫通樋、又不破之内剗去其節、建橫通樋雨水落所